

図2 フィードバックを取り入れた指導計画例(4年算数) 月 3時間(2時間+1)

1. ①重点指導内容を復習して学習内容の保持とつまずきを直すことができるようにする。	(1) つぎの重点指導内容の問題を解く A: 乗数が3位数の乗法計算 B: 除数が2位数の除法計算 C: 四則混合の式計算 D: 複合図形の求積 (2) 等分して「つまずいた問題」の解き方を調べ、類似問題を解く。 (3) 解いた結果について、グループごとに話し合おう。 (4) 前時の類似問題で誤りの多かった問題の解き方を話し合う。 (5) 計画にしたがって、A~Bのコースごとに既習の類似問題や「よくしゅうら」から問題を選んで解く。 (6) 解いた結果を話し合い、グループごとに話し合おう。	○ 2学期の学習内容からどの程度ずつ出題し、各自のつまずきを見つけてさせる。 ○ 具体的に問題を示し、基本的なものに限定する。 ○ 同じ名で各々のグループをつくり、解き方や調べ方を指示して問題を解かせる。 ○ ほかのコースの問題は解かないので、復習の意味でとりあげろ。 ○ あくまで、つまずきの原因を除去するための問題を選んで解かせる。 ○ 前期までに、できるような場合は、別なコースにうつさせる。全部解決までできる児童は小先生となって、助け合い学習の進捗を見る。 ○ 遅れがちな児童や理解が不十分な児童を中心に個別指導を徹底する。
2. ②つまずきを直す問題を見つけ、確実に解くことができるようにする。	(1) 前時の類似問題で誤りの多かった問題の解き方を話し合う。 (2) 計画にしたがって、A~Bのコースごとに既習の類似問題や「よくしゅうら」から問題を選んで解く。 (3) 解いた結果を話し合い、グループごとに話し合おう。	(1) 各自やグループのめあてをたしかめ、計画によって問題を解く。 (2) グループごとに、解いた結果をたしかめる。 (3) グループでの誤りの多かった問題を発表し合い、全員でたしかめる。 (4) 「復習」にはいる前とくらべ、学習成果を話し合う。
3. ③つまずきを直す問題を見つけ、確実な全員が確実に見えるようにする。	(1) 前時の類似問題で誤りの多かった問題の解き方を話し合う。 (2) 計画にしたがって、A~Bのコースごとに既習の類似問題や「よくしゅうら」から問題を選んで解く。 (3) 解いた結果を話し合い、グループごとに話し合おう。	(1) 各自やグループのめあてをたしかめ、計画によって問題を解く。 (2) グループごとに、解いた結果をたしかめる。 (3) グループでの誤りの多かった問題を発表し合い、全員でたしかめる。 (4) 「復習」にはいる前とくらべ、学習成果を話し合う。

- 遅れがちな児童をなくすために、一人一人の能力差に応じた目標、内容、時間、方法などを組み入れた指導計画を作成しなければならぬという考えに立ち、フィードバックする時間を特設した。(図2)
- ① 一時間の中でも、できるだけ練習時間を設けた。
- ② 児童のレディネスと教材の難易度の違いに応じて、指導の目標等と練習時間を指導過程の適切有効な段階に設けた。
- ③ 一単元(題材)の中では、できれば十時間に一時間、最低でも二十時間に一時間設けた。
- ④ 二カ月間に一小単元の復習の時間を設けた。

- ⑤ つまずきを見つけそれに応じた指導を一人一人に徹底させるため、個別化を図りやすい学習形態を工夫した。
- (二) 個別化を図る授業を研究実践する。
- 一斉指導における個別指導や、グループ指導における個別指導をより効果的に行うために、次のような指導法が有効であった。
- (1) 反応型別指導
計画・見通しの段階で、本時のねらいに到達するために、課題追究に役立つ考えや方法をもつている者ごとにいくつかのグループ(類型のグループ)に分け、そのグループ別に課題を追究させた。
- (2) つまずき類型別指導
これは、児童が「つまずいている内容や、原因別にグループを組織して学習をすすめるものである。」
つまり、つまずきの多様さに即応でき、「つまずいている内容を」「児童の能力に合わせた練習問題と指導法と時間」を原則にした。(図3)
- これら二つをふだんの授業に取り入れたら、つまずき類型別指導は、フィードバックするときの授業に活用した。
- 次に、つまずき類型別指導を活用したフィードバックする指導法について述べる。
- ① 単元(題材)内フィードバックの編成とプロセス

- ⑤ つまずきを見つけそれに応じた指導を一人一人に徹底させるため、個別化を図りやすい学習形態を工夫した。
- (二) 個別化を図る授業を研究実践する。
- 一斉指導における個別指導や、グループ指導における個別指導をより効果的に行うために、次のような指導法が有効であった。
- (1) 反応型別指導
計画・見通しの段階で、本時のねらいに到達するために、課題追究に役立つ考えや方法をもつている者ごとにいくつかのグループ(類型のグループ)に分け、そのグループ別に課題を追究させた。
- (2) つまずき類型別指導
これは、児童が「つまずいている内容や、原因別にグループを組織して学習をすすめるものである。」
つまり、つまずきの多様さに即応でき、「つまずいている内容を」「児童の能力に合わせた練習問題と指導法と時間」を原則にした。(図3)
- これら二つをふだんの授業に取り入れたら、つまずき類型別指導は、フィードバックするときの授業に活用した。
- 次に、つまずき類型別指導を活用したフィードバックする指導法について述べる。
- ① 単元(題材)内フィードバックの編成とプロセス

図3 学習指導案例

第6学年1組 名 熟語科 学習指導案 指導者 ○○○○

1. 熟語の使いかた(本時)しゅうら
2. 本時のねらい(本時)しゅうら
○ Aグループは熟語の構成のし方や意味がわかり、熟語を正しく使うことができるようにする。
○ Bグループは熟語の意味をとらえ、文の中で意味が通るように熟語を正しく使うことができるようにする。
○ Cグループは熟語の意味をとらえ、文の中で適切に熟語を使うことができるようにする。

3. 研究主題との関連
○ ひとりひとりの学力の実態に応じてフィードバックの時間を特設し、基礎的事項の定着を図る。
○ 効果的指導法はどうかすればよい。

4. 指導過程

段階	学習内容	活動	時間	指導上の留意点
課題把握	(1) 各グループごとの本時のねらいを確認する。 (2) 各グループごとに練習する。		7'	○ 自分の作文を自己診断させて、練習の必要性をたらせさせておく。
課題追究	Aグループ ○ 意味にあう熟語をさがす練習をする。 ○ 構成のし方によって熟語を分類する。 Bグループ ○ 熟語の意味を調べる。 ○ 熟語の構成のし方を考えて正しく使う練習をする。 Cグループ ○ 熟語の意味を調べる。 ○ 熟語の構成のし方を考えて正しく使う練習をする。 ○ 熟語の構成のし方を考えて正しく使う練習をする。		30'	○ 児童の実態から3つのグループに分け、プリントを利用して、効率的に学習を進めさせる。 ○ 言葉の意味を考えたが、正しい熟語を使うことができないかどうか質問をしながら確かめる。 ○ 意味が通みかわらない熟語は辞書で調べて、定着を図るようにする。
結果確認	(3) 学習のまとめをする。 ○ 熟語についての評価問題を各グループ毎に解く。		8'	○ 評価問題をやり、本時のねらいに到達できたか確かめる。

- ② 単元(題材)外フィードバックの編成とプロセス(図省略)
- いくつかの単元(題材)を指導したあとに、一〜三時間のフィードバックする時間を取り指導するものである。
- これは学習して期間が過ぎて内容を忘却している児童がいるため、学習内容の保持、定着と次単元(題材)のレディネス向上を目的とした。
- この授業を組織する場合、児童の実態を的確にとらえ、つまずきの内容や原因とグループ(一斉、等質、異質)の指導形態のかかりをよく

- 検討して行ったが効果的であった。
- (一) 充実感を味わわせる指導法
今までの授業を改善する必要性から充実感を味わうのは児童がどんな状態の時の感情なのかを明確にし授業で目指すべき姿をとらえること。
- (2) その姿を実現するための指導の核心となる方法を決め、その指導法の確立を図ること。
- ① 二つを柱として研究実践してきた。
目指すべき児童の姿
学習内容が理解できなかったり、わからなかったりした状態などから「よくわかり」「よくでき」「いつでも使える」とともに、学習内容のよさや題材の内容を「味わう」状態になったときの心的状態に充実感がうまれると考えた。
- それを実現するための方法として次の五つを考え、授業の中で実践した。
- ② 指導法
ア 課題の把握と意欲の持続のさせ方
イ 充実感を味わう場面の設定
ウ 学習評価のしかた
エ 学習のしかた
オ 教科(国語、算数、体育)独自の的方法

- ③ 成果と反省
三年間の実践から、いくつかの成果が得られた。
第一に、児童の学習に取り組む姿勢